

同人作品

君のゆめ 秋山義仁

突然のデパート閉店弘前の夜更け人を見ずもう冬隣り

たそがれの龍飛―小泊すすきの葉放り出されたちつくす枯れ野

水に堅パンリュック下げ北の国今日はいずれの街か海岸

土砂降りに思い出のはじまりありてありがとう忘れないあの時の花柄の傘

去り行くは桜の季節息を止めあなたの口付け今も待っている

秋が来るコスモス少し君が為夏の風鈴空にとぼそう

しまいこむ夏の装い熱かった今年の続き次も来るかも

君のゆめ触れた気がする僕が居る風呂場と子供一つの布団

手をつなぎ一緒に歩くどこまでも私死んだらあなたも死んで
冬の陽に残り柿は一つあかね空雲染める今日は佳い日だ

夕暮れどきの歌人 石邊綾子

太陽の記憶それから非在なるものへのオマージュ捧げつついる

あの人は嘘もつけずに沈黙のままの横顔たそがれどきは

珈琲をふたくちすすり秀さんは遠く未来を見つめておった

亡き人の声に目覚める冬の日には健診結果に心も寒い

青白く手首に浮かぶ血管を湯船に沈め明日哀しき

氷雨降りぬかるむ道を戻ろうか進むしかない我が私小説

右の手の痺れを誤魔化しそのうちに遠くなりゆく正常な日々

澄み切った空気に冬を吸い込めば石焼き芋の香も交じりたる

今はただ夢をまといて八畳の床にとりどり衣擦れの音
トキ色に染まりてゆきぬふるさとの空に一羽の記憶をたどり

年の暮れ 井上省吾

あと二日今年も終る年の暮れいろいろあつた過去振り返る

くもり空時々晴れて風はなく年の終りを静かに過す

テレビ観て今年の暮を過してるこの幸せを来年もまた

大晦日穏やかな朝氣持ちよくこの一年を振り返り見る

こんなことあんなことなど思い出す辛いことなどさっぱり忘れ

大晦日掃除も終えて気持ちよく年明けを待つ心のゆとり

年の暮れ雲の流れを窓越しにぼんやりと見て幸せ感じ

年の暮れ何をするかを考えて枯葉も落ちた庭木剪定

来年はどんな出来事あるのかなまだこぬ未来楽しみに待つ
夜明待つ楽しみだけが来るような新しい年夢みて床に

年の始め

夜が明けて新しき年迎えては世界の平和我家の平和
変化なく過せるように願いつつ先祖に祈り新年迎え
輝ける令和七年元旦に願いはひとつ進歩あるのみ
さあやるぞ意気揚々と飛び起きて新年の朝希望を持って
よい年に成るかは自分次第だと心新たにゆとりを持って
新年を無事に迎え有難く希望楽しみ意欲を持って
新年の朝を迎えて思うのは何が起るか未知の世界は
おせちあり雑煮を作り新年を迎えた朝は出だし最高
朝風呂で体清めて新年を空青くして心も軽く

青い鳥捜しにいかずわが内に氣持次第で幸せはある

父が去り八十年が過ぎ行きて我を護りて新年迎え

新年を迎える度に歳重ね世の中変り氣持ちも変る

新たなる希望を持って進む時心は躍る体は動く

なんのその歳はとつても氣は若くさあこれからと氣合いを入れて

新年に家計簿を見て考えるどこをどうして切詰めるかを

ハクサイにシメジを加えキムチ鍋味噌味付けて今夜のおかず

新年の曇り空にて風も吹き三か目の日の氣温上がらず

庭の木の枯葉も落ちてさっぱりとして日当りもよく

やってみて経験をして少しづつ解かり始めた家庭菜園

酷使した野菜畑を休ませて土作りして次に備える

長いお別れ 甲村雅俊

片仮名で書けばやうやく中性にオムツはかつて女性語なれば
ボケてゐる人のこころと健康な人のこころに違ひがあるか
遡行して親は子になる子の襁褓替へた事なきわが替へたれば
我々は認知症とふ単語から何かわかつたやうな気になる
本当はわれもあなたも人類はみな認知症それでいいのだ
認知症の父の目玉を見詰むればここぞ現象学的還元
偽りの涙を流す 人生を猶予期間のごとく生きれば
実家まで歩きながらの歌つくり介護の日々は長いお別れ
超自我がボケたる後のわが自我はふらふら二日酔ひに苦しむ
病臥するひとりの歌人すやすやとときに目蓋を開けて吾を見る
父親を馬鹿呼ばはりし出ていけと言はれたあの日から幾年か

わが父を車椅子に乗せて病院へ 小春日和の短い旅行

夜の病院

終焉の気配ひたひた迫るなり三年前から介護始まり

西方の六名山にてしめやかに阿弥陀来迎出立準備

二回目の危篤の知らせ受けられたれば夜の病院廊下を走る

白ネコ 氷室敬子

黄色真つ盛り二か月振りに庭に出て季節は大きく変わっていた

フェニックス木の側に立ちもういいよ忘れていいから空を見上げて

白ネコはにゃんと鳴く気まぐれじゃないよ知性があるから

白ネコの横顔はぴんとして夫つまにある知性が好きよ

お茶一杯 本田洋子

街路樹の枯れ葉ガサガサ吹き溜まり飛んでけ飛んでけ富士の裾野へ
師走の日学びの後のお茶一杯おいしそうに君は飲み干す
晩秋を歌わざりして何歌う奮起しながらペンを執る夢
枯れ葉舞う垣根のそばに一群れの白い小菊のいと清々し
コーヒーとトーストだけの朝食にG線上のARIA流れて
娘って恋しきものよ母にとりて まして遠くに住みて在りせば
大晦日やたら静かな近隣は家族で揃いお墓参りか
一年の大袂いの儀吾れは行く厳そかなりし神のみに

年賀状

南天の赤い実のそばヤスデの実紅白揃いてお目出たき庭
むら雲をずんずん押し分け陽は昇る一月一日晴天なりし

本年は善き事有りとは賀状にて一族集うと嬉しき知らせ
吾が居間は隅の隅まで陽が入り隠し事さへ照らしてしまふ
孫からの年賀状にてハッとせりその楽しさにしてやられたり
久しぶり雨音のして眼が覚める屋根打つ音の激しき故に
降れよ降れ四十日振り降れよ降れカラカラ大地潤して行け
見上ぐれば昼の半月千切れ雲しょうかん小寒の風冷たく吹いて

甲村秀雄先生 追悼

悲しみは七、七、四十九日まで偉大なる歌人の想い出徐々に
片寄らず水も漏らさぬ批評眼吾れ育てられ今に繋がり
飄々とナイルを渡り半世紀 夕日に溶けて星と成るらむ

わたくしは困っています　　丸山　光

入院に娘とわたしが付いていき私一人が受付で待つ

教え子の結婚祝いにいくら出す娘に聞いて驚く相場

卒寿すぎからだの劣化激しくて置物のごと皆に運ばる

何ゆえか男はいつもゴミ係隣の主人と黙礼かわす

今生の別れのようなメモ書きをわれに残して妻の入院

千円のランチのお寿司の巻物は鉄火巻なり今日は大吉

千円のランチばかりの注文に寿司屋の親父のいつもの無口

親なれば老いてもなおも祝福をキミの名をあげ二人で祈る

明日ありやありそれゆえになすべきを明日に延ばして怠惰に生きる

無造作に送りましたと払込書期待されても二枚はいらぬ

具体的地名をあげて紛争の平和を祈るクリスマス・イブ

スーパーに行く回数を減らしても支払う額は前より増える
パラ色の明るい未来教えられ信じた結果は戦争ばかり
人類の歩む道から離れたいどこもかしこも戦争ばかり
近頃はあのそのばかり連発しそれでも妻との会話なり立つ
神様よおきてくださいわたくしは切羽つまって困っています
はちやめちやな人生終えた父親の遺影の前で黙する娘
母親は死を恐れずに逝きましたあまた病を抱えたままで
色彩の豊かな花に囲まれて祭壇のま中にて笑顔の遺影